

【7-7-a】

公共施設計画の設計者選定における市民参加システムの実態

—新潟駅駅舎・駅前広場計画提案競技を事例として—

A Participation System in the Designer Selection of a Public Facility

—A Case of Niigata Station and Station Square Competition—

高橋知里^{*1}, 岡崎篤行^{*2}

Chisato TAKAHASHI and Atsuyuki OKAZAKI

公共施設計画への市民参加が活発に行われているが、優れた公共施設を市民参加により計画するためには、設計者選定段階でも参加を行うことが重要となる。そこで、新潟駅駅舎・駅前広場計画提案競技における参加システムの実態を明らかにする。その結果、市民の意見を応募要項別冊としてまとめることで、意見を応募者や主催者に伝え、公開審査により事業の透明性が確保された。しかし、事業主体の連携が不十分であり、それが要因で様々な市民の不満を招いている。

Keywords : *Public Participation, Designer Selection, Public Facility, Design Competition,*

Niigata Station

市民参加、設計者選定、公共施設、設計競技、新潟駅

1 研究の背景と目的

近年、公共施設計画への市民参加が活発に行われている。公共施設計画への参加は、構想段階と設計段階において多く見られるが、設計者選定段階での参加は少ないのが現状である¹⁾。公共施設計画に対する住民の関心が高くなった近年において、優れた公共施設を市民参加により計画するために、設計者選定においても参加を行うことが重要である。

公共施設計画への市民参加に関する既往研究には、構想段階・設計プロセスに焦点を置き、その実態を明らかにした研究²⁾は多いものの、設計者選定に焦点を当てたものは少なく、設計コンペに焦点を当てたもの³⁾でも、事例報告であり、体系的な研究はされていない。

そこで本研究では、構想段階から設計段階に至るまで参加が取り入れられている新潟駅駅舎・駅前広場計画提案競技(以下、新潟駅コンペ)を事例とし、特に設計者選定段階に着目して、①運営体制と市民参加の経緯を明ら

かにし、②手続きと内容の視点から設計者選定段階における参加システムの実態を明らかにし、③今後の課題を検証することを目的とする。

2 対象事例の概要

県と市は、1992年度から共同で新潟駅周辺整備計画の検討を始め、1998年度には新潟駅周辺整備基本構想を取りまとめた。それにより、鉄道在来線の高架化、幹線道路・駅前広場の整備を行う新潟駅周辺整備事業を進めている。この事業の中で、駅舎を含む駅前広場の優れた基本計画を求めため、JRの協力を得ながら2002年3月15日から12月15日までの9ヶ月間、市民参加を取り入れた設計競技が実施された(表1)。

3 調査方法

本研究では、①市やワークショップ(以下、WS)等の資料による文献調査、②関係者へのヒアリング調査を

*1 新潟大学大学院自然科学研究科 博士前期課程 Graduate student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.

*2 新潟大学工学部建設学科 助教授・工博 Assoc.Prof., Dept.of Civil and Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr.Eng.

行い、参加組織の構成と運営体制、参加の経緯を明らかにする。また、③WS後の参加者に対する簡単なアンケートや寄せられた意見から、市民の満足要素・不満要素を把握することで手続きの実態を明らかにし、(2)を踏まえた上でその要因を考察する。さらに、④新潟駅コンペ最優秀案において、審査委員会の審議から計画内容を評価する。これらより、今後の課題を検証する。

4 設計者選定段階における参加組織の構造(表2、図1)

新潟駅コンペを企画・運営する企画会議、市民の意見を反映するための窓口委員会、応募者の審査等を行う審査委員会が設置された。企画会議は主催者である県と市、協力機関であるJRの職員によって構成されている。企画会議は、助言や協力を得るため専門家3名からなるアドバイザーチームを設置した。審査委員会は、6割がアドバイザーチームによる推薦や紹介によって選ばれ、組織された。また、市民参加組織の設立・運営は市民参加活動を行っているNPO法人まちづくり学校に委託され、まちづくり学校が経済・建築・市民参加等の様々な分野から窓口委員会の人選を行い、その事務局を務めた。窓口委員会は、市民が主体となった市民参加活動を企画・実施し、審査委員会に新潟駅コンペへの市民参加に関する要望書を提出したり、主催者に審査の公開を申し入れるなどのさまざまな活動を行い、市民の意見を主催者側に伝える窓口として機能した。

5 市民参加の経緯(図2)

5-1 構想段階

構想段階では、まず基本構想が提示され、それをたたき台として、市民との対話が始まった。市は様々な立場の市民と意見交換を行い、計画に反映させるため、懇談会を設立するほか、説明会やシンポジウム、アンケートなどを実施し、その経緯を「まちづくりニュース」や市報等で市民に伝えた。また、有志市民からなる実行委員会と市との共催で市民意見交換会「わいわいガヤガヤ駅サイト」を開催し、計2回のWSで意見交換を行った。

5-2 設計者選定段階

設計者選定段階では、3段階で参加の場が確保された。

(1)第一段階作品提案前

窓口委員会はコンペに市民意見を反映するため、独自のホームページ等で市民の意見を集め、「わいわいガヤガヤ駅サイト」の意見を併せて、公募市民による編集会議を

行い、応募要項別冊「市民の想い」を作成した。

(2)第二段階作品提案前

公開による第一段階審査会で5名を選定し、全作品の公開展示、市民と第一段階審査通過者との意見交換会が行われた。これらの意見はまとめて、応募要項別冊「市民の想いII」に編集された。また、応募者には、提案図書の中で「市民の想い」への対応についての説明を求めた。これら2冊の「市民の想い」は審査委員会にも送付され、審査では市民との対話能力が重視された。

表1 新潟駅コンペの概要

主催	新潟県、新潟市
協力	東日本旅客鉄道株式会社
選定方式	設計競技方式(公募)
競技対象	駅舎と駅前広場の基本計画
実施期間	2002/3/15~2002/12/15
審査委員長	大熊孝(新潟大学教授)
応募作品数	125点
最優秀賞	堀越英嗣(アーキテクトファイブ)

表2 参加組織の概要

組織名	目的・役割	構成			
		行	協	専	市
新潟駅駅舎・駅前広場計画提案競技企画会議	新潟駅コンペ事務局 審査委員会事務局	6	2		
アドバイザーチーム	企画会議への助言、協力、提案			3	
NPO法人 まちづくり学校	窓口委員会事務局			○	
新潟駅駅舎・駅前広場計画提案競技審査委員会	検討事項の審議・答申 応募作品の審査	3	1	6	
新潟駅コンペ市民窓口委員会	市民が主体となった市民参加活動の企画・実施、コンペへの市民意向の反映				6

※行…行政、協…協力機関、専…有識者、建築家等の専門家
市…市民

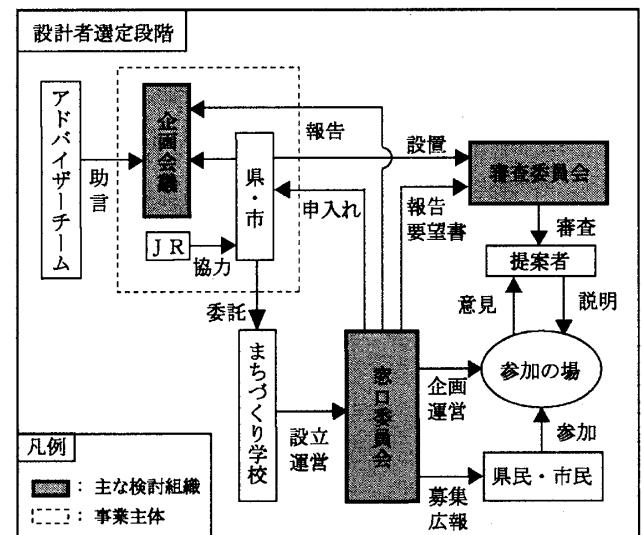


図1 設計者選定段階における運営体制

(3)最終審査時

最終審査会は、提案者のプレゼンテーションや審査委員会によるヒアリングも含めて全面公開され、市民が見守る中、最優秀案が選定された。これらの経緯は、専用のホームページで広く公開された。

5-3 設計者選定段階

設計段階では、公募市民による「駅きかく会議」を立ち上げ、基本設計WSを開催し、設計者との対話を繰り返しながら駅前広場の基本設計を行った。今後も市民が関わり、事業を進めていくことになっている。

6 設計者選定における参加システムの実態 (表3)

①WS後のアンケート、②要項別冊の意見、③関係者へのヒアリング、④文献4)の関係者の感想から手続きに対する市民の満足と不満を、⑤審査会の議事録から計画内容の評価を分析する。手続きは長期的なフローの構想であるプロセス、具体的集まりの企画であるプログラム、主体や組織の参加形態の3つの視点で捉える。

6-1 手続きの実態

(1)プロセスの実態

窓口委員会の強い要望によって最終審査が公開され、全てのプロセスが公開されたことで事業の透明性が確保された。また、意見への対応が明確となったのは、市民の意見を応募要項別冊と位置づけ、提案図書の中で別冊への対応を説明するよう応募要項に記載し、その対応を作品を通して確認することができたこと、通過者によるプレゼンテーションが設けられたことが要因だと考えられる。応募要項作成の段階から参加を取り入れたことで、作品提案前に意見を伝えることができたが、基本構想や前提条件が決定する前に参加する仕組みがなかったことや前提条件の不明確さに対する不満があり、早い段階での参加や行政による説明が不十分であったといえる。また、駅舎に関する部分は建設時の基本的な目標と位置づけられており、それが事業実現への不満となっている。

(2)プログラムの実態

編集会議、意見交換会ともにWS形式が用いられた。どちらもいくつかのグループにわかれてディスカッション

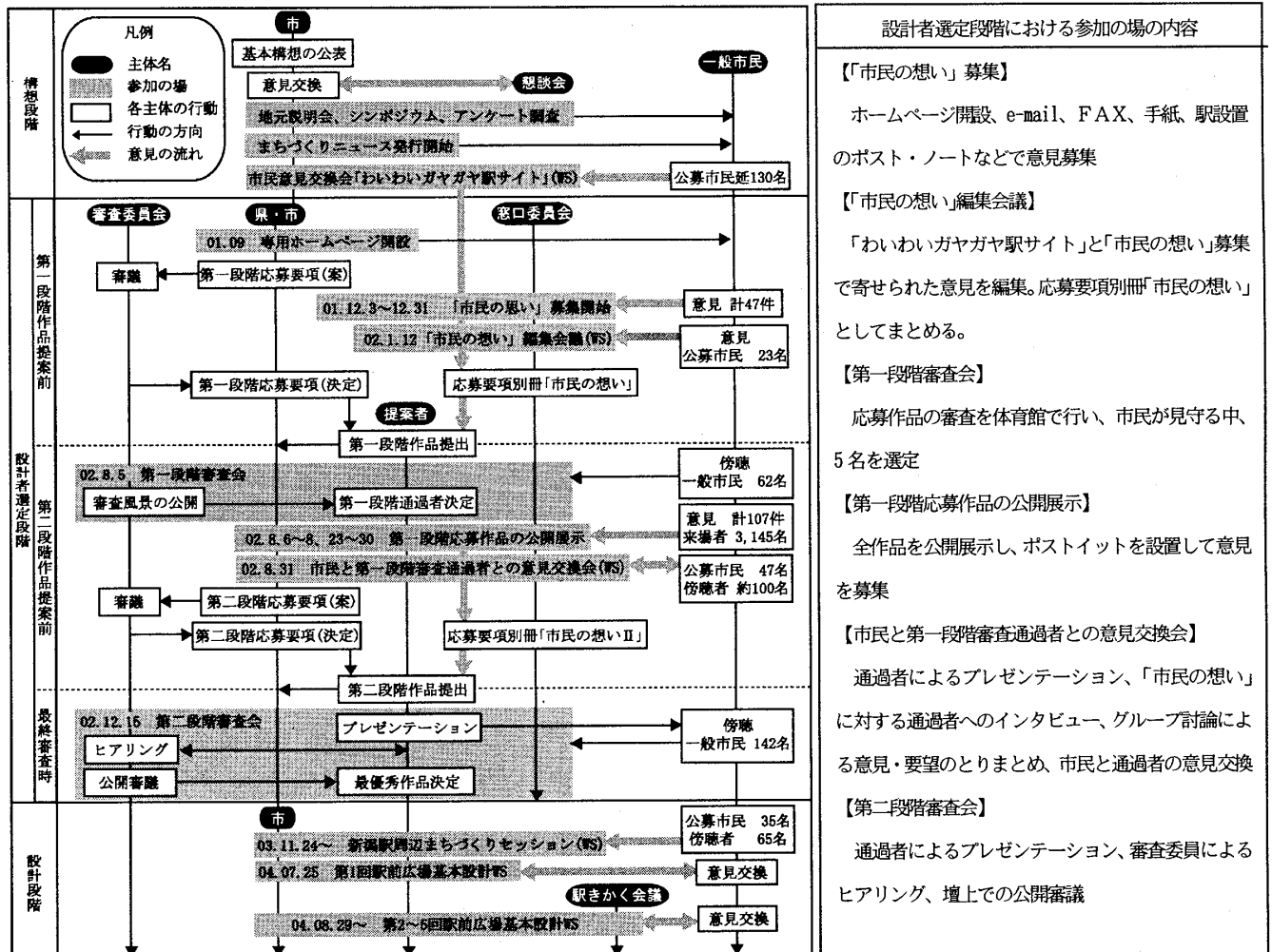


図2 参加の経緯

ンを行い、各テーブルにはファシリテーターが配置された。それによって、ある程度の満足を得られたと考えられるが、議論時間が短く、十分に議論できなかつたという意見が多く見られ、限られた時間を有効に使い議論することが求められる。

(3)主体や組織の参加形態の実態

参加の場には多様な市民が参加したが、協力機関であるJRは一般市民が参加する場に参加していなかった。それが市民の不満でもあり、駅舎部分に関する前提条件の説明不足、またそれによる事業実現への不安を招いた。これらは、事業主体同士の連携が不十分であったと考えられ、今後一体となって計画を推進する必要がある。

6-2 計画内容の実態

最優秀案は、「人、交通、自然が気持ちよく循環する『都市の庭』」をコンセプトとし、駅前に幅 60mほどの巨大なプラザを設置し、2階レベルをペDESTリアンデッキでつないだ案であった。最終審査においては、わかりやすい点、将来期待できる点等が、評価されたが、「新潟らしさ」が欠けているという評価が目立った。今後市民との対話の中で「新潟らしさ」をつくっていくことが求められている。

7 結論

(1)県・市・JR と事業主体が複数ある中で、企画会議、審査委員会、窓口委員会がそれぞれ独立して設置され、

窓口委員会が市民と行政をつなぐ機能を果たした。

(2)設計者選定段階では、第一段階作品提案前、第二段階作品提案前、最終審査時の3段階で参加の場が確保され、それによって、提案前に意見を伝え、その結果を作品やプレゼンテーションを通して確認できた。

(3)審査の全面公開により事業の透明性が確保され、提案者の「市民の想い」への対応について説明を要求し、意見の位置づけと対応が明確となった。しかし、事業主体の連携が不十分であり、JRの不参加が市民への前提条件の説明不足や計画の実現への不安を招いた。

計画内容は、わかりやすく、将来の柔軟性があったが、「新潟らしさ」に欠ける案であった。

(4)今後の課題として、事業主体が連携をとり、市民が参加する場へ参加し、市民と対話する必要がある。また、今後市民との対話の中で、「新潟らしさ」を創出していく必要がある。

【参考文献】

- 1) 志村秀明：「参加型公共施設の現状と課題」、日本建築学会編、まちづくり教科書第三巻 参加による公共施設のデザイン、丸善、3(2004)、pp.76-84
- 2) 龍 元他、公共文化施設の構想から設計に至る過程における市民参加による意思決定の仕組みに関する研究—3つの文化施設プロジェクトを事例として—、日本建築学会計画系論文集 No.552、2(2002)、pp.117-124
- 3) 斉藤進、ワークショップと設計コンペを活用した市民参画型施設づくりの実践—神奈川県横須賀市を事例として—、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1、9(1999)、pp. 741-742
- 4) 新潟県・新潟市、「新潟駅 駅舎・駅前広場経計画提案競技記録 2001.4~2002.12」

表3 参加者の参加システムに対する満足要素と不満要素

	市民参加に求められる要素	実態		要因
		満足要素	不満要素	
プロセス	前提条件の明確化	-	・前提条件自体 ・前提条件が不明確	前提条件決定前に参加の仕組みがなかった 事業主体の一体的参加がないことによる説明不足
	物事が決まる前からの参加	・応募要項作成の段階からの参加	・基本構想・前提条件が決定する前に参加がない	基本構想・前提条件策定前に参加する仕組みがなかった
	十分な参加の機会	・参加の場が与えられた	・議論の場の不足	窓口委員会による参加の場の企画・実施
	意見への対応	・意見に対して返事がある	-	提案図書の中で別冊への対応の説明を求めた
	プロセスの公開	・審査過程をすべて公開した	・一次通過作品の通過理由が不明確	窓口委員会の働きによって最終審査まで公開された
	事業の実現	-	・事業が実現するかが不明	駅舎の設計が担保されていない、JRの不参加
手続き	議論内容の充実	・充実した議論ができた	・議論テーマとその量	テーブルファシリテーターの存在
	十分な議論時間	・進行がスムーズ	・議論時間が短い	
	十分な発言の機会	・言いたいことが言えた ・いろいろな意見が開けた	・あまり発言できなかった	
	オープンな雰囲気	・WSが楽しかった	・気軽に参加できる雰囲気・一体感が必要	
参加形態	参加者の多様性	・参加者が多様である	・参加者に偏りがある、若い人が少ない	市民の関心の低さ
	主体同士の連携	・窓口委員会の存在	・事業主体の参加がない	事業主体同士の連携が不十分である
	的確な情報提供	-	・一般市民へのPRが少ない	ホームページ、市報、新聞などによって情報提供したが、市民の関心はそれほど変わらなかった
内容	質の高い設計	・将来の多様な需要にも対応可能 ・シンプルでわかりやすい	・「新潟らしさ」に欠ける	-